

児童自立支援施設と併設校における多重知能 (MI) 理論を活かした自立支援の連携の試み

—学級担任と入所児童及び教職員とのかかわりを通じて—

瀧本千鶴

【問題意識と目的】

1998年の改正児童福祉法の施行により、教護院は児童自立支援施設へと改称された。児童自立支援施設とは、「不良行為をなし、又はなすおそれのある児童及び家庭環境その他の環境上の理由により生活指導等を要する児童を入所させ、又は、保護者の下から通わせて、個々の児童の状況に応じて必要な指導を行い、その自立を支援し、あわせて退所した者について相談その他の援助を行うことを目的とする」（児童福祉法第44条）施設である。改称とともに、教護院で行われていた教護院職員による学校教育に準じた学科指導（以下、準ずる教育とする）は、法的に規定された公教育である学校教育へと転換されることになった。

このことに関連して、厚生労働省（1998）も「児童養護施設等における児童福祉等の一部を改正する法律の施行に係る留意点について」の通知を各都道府県などに発出し、文部科学省（1998年）も同様の通知を発出したものの、学校教育の導入を各児童自立支援施設や自治体に委ねた。現時点（2021）において、全国の児童自立支援施設57施設のうち2施設で準ずる教育が、55施設で学校教育が実施されている。しかし、各児童自立支援施設における学校教育は、その歴史や支援体制、教育実践等において大きく異なる（岩田、2022）。また、発達障害や副次的な問題のある入所児童が全体の4割を占めることから、彼らの特性に応じた指導・支援の必要性も明らかになった（玉城・神園、2013など）。

岩田（2022）は、全国児童自立支援施設協議会（2020）による運営実態調査から、児童自立支援施設における学校教育の課題として、「教員の不足に関すること」、「特別支援を必要とする児童への対応に関すること」、「児童の学力差への対応に関すること」等を挙げ、こうした環境下において、教員と施設職員との連携・協働は必須であるとする（pp. 33-34）。しかし、児童自立支援施設におけるこうした実践報告や研究はほぼ見当たらない。児童自立支援施設と同様に義務教育段階の子どもが入院する少年院においては学校教育に向けた課題を克服するために、独自の教科指導の取組が見られる（藤田、2013；高橋、2020など）。高橋（2020）は、教科指導（補習教育指導）の取組において、集団授業による数学の基礎学力修得が抽象的概念の理解を可能にして学力の向上につながることを明ら

かにした (p. 130)。矢作 (2021) は、少年院の教科指導の内容や課題を明らかにしている。これらのことから、児童自立支援施設においても、施設職員と教員との連携・協働体制の構築に関する実践や研究の積み重ねによって、独自の学校教育の取組が可能になると考える。

児童自立支援施設における連携・協働体制の構築に必要な支援の指針として、厚生労働省児童家庭局家庭福祉課 (1998) が監修した『児童自立支援ハンドブック』には、「自立は…… (中略) ……、発達期における十分な依存体験によって人間への基本的信頼感を育むことが、児童の自立を支援する上で基本的に重要である」と示されており、さらに「児童の自立を支援していくということは、一人ひとりの児童が個性豊かでたくましく、思いやりのある人間として成長し、健全な社会人として自立した社会生活を営んでいけるよう、自主性や自発性、自ら判断し決定する力を育て、児童の特性と能力に応じて基本的生活習慣や社会生活技術 (ソーシャルスキル)、就労習慣と社会規範を身につけ、総合的な生活力が習得できるよう支援していくことである」と示されている (pp. 18-19, pp. 30-35)。

これらの先行研究をふまえて、実践対象である A 児童自立支援施設 (以下、A 施設とする) 職員と、その併設校 (以下、B 校とする) の筆者を含む教員が自立支援の方針について話し合った結果、入所児童の特性等の配慮に基づいた個別最適な学びと協働的な学びを通じて、社会的能力 (小泉・山田, 2011) を育成する自立支援を連携して行うことにした。なお、本実践報告では、入所している小・中学生全体を福祉領域の表記にならない、「入所児童」とするが、後述の対象とする中学生個人については、「生徒」とする。現在の個別最適な学びや協働的な学びの本来的な趣旨を組み込んだ先行研究 (本田, 2006 など) に、有効性が検証されている多重知能 (MI) 理論を活かした (以下、MI を活かしたとする) 活動がある。本田 (2006) は、脳の働きである 8 つの知能 (音楽・リズム的知能、身体・運動的知能、言語・語学的知能、内省的知能、対人的知能、論理・数学的知能、博物学的知能、視覚・空間的知能) の理解や伸ばし方を挙げ、それぞれの知能によって、情報の受容や処理の仕方が異なるため、子どもたちの脳をバランスよく発達させるような学習方法を展開していくと、授業や友だちの伝えたいことがわかりやすくなり、その結果、学習意欲が増し、人間関係も活発にすることができるとし、MI の活用の効果を示している (pp. 12-13)。MI を活かした実践には、学力向上を目指して ASSESS によるアセスメント結果を活用した取組 (五條市立五條小学校, 2017)、MI の理論にゴフマンのフレーム理論を援用することで創造的な学びが可能になることを示唆した実践 (中村・今井・酒向, 2021)、MI 理論に基づくグルーピングとデボノの帽子を用いた省察を取り入れて内省を深めることを目指した実践 (清水・村上, 2021)、MI のレーダーチャートやアンケートによって子どもたちのメタ認知を調査した実践 (富永・村上, 2022) 等がある。MI のこれらの成果と内省を働かせることが苦手である入所児童の特性を鑑みて、筆者が MI の理論を A 施設や B 校での活動に取り入れて、施設職員と教員の連携による実践を行う。その活動の中で、学級担任としての筆者が対象生徒に対して定期的に教育相談を行い、対象生徒の語りから、内省的知能を深めることができているのかを検討する。また、『児童自立支援ハンドブック』(厚生労働省児童家庭局家庭福祉課, 1998) で示された「自立」や「自立支援」の定義から、めざす「自立支援」の有効性の検証に、社会的能力 (小泉・山田,

2011) の状態を示す SEL-8S 自己評定尺度に着目した。本実践は、内省的知能を軸とした MI の理論を活かした自立支援の連携の試みの社会的能力への有効性を学級担任の立場から明らかにすることを目的とするものである。

【方法】

1 対象者

対象者は、中学校生徒 C である。筆者は B 校在職時に実践を行った。筆者の赴任前、分教室であった B 校では、主に施設職員が教科指導を行っていた。筆者の赴任後、分校として教員による学校教育が始まった。学校教育の実践には施設職員、教員や入所児童の在籍校教員間での情報共有や共通理解が不可欠である。そこで、筆者は、施設職員と教員による事例検討会、日々の打合せ、不定期な相談会での情報共有を提案した。また、学校での活動の方針や方法を筆者が施設職員に説明し、連携の協力を求めた。具体的な連携として、施設職員を含めた授業の補助、寮での個別学習や練習への協力である。そして徐々に自立支援の連携を進めることができるようになった。以下で、それらの情報共有によって明らかになったことを踏まえた生徒 C の状態像について述べる。

(1) 生徒 C の A 施設入所までの経緯と入所後の経過

生徒 C は、生後間もなく祖父母の元に預けられた。小学校低学年の頃から不登校になり、上級生とともに深夜徘徊等をするようになった。その後児童相談所の措置を経て、中学校 2 年次に A 施設に入所して、施設内での寮生活と併設の B 校での学校生活を送ることになった。

筆者は、B 校の生徒 C の学級担任として 2 年間かかわることになった。生徒 C は、両親から捨てられたという非常に強い孤独感から、無気力な状態に陥ることがあった。事例検討会で、生徒 C には学力を身に付けさせて高校進学を実現させることで、自身の人生のとらえ方の変容を目指す支援が打ち出された。

(2) 生徒 C のアセスメント結果

入所時 (中学校 2 年生, 14 歳) に実施された生徒 C の WISC-IV 知能検査の結果は、「Full Scale IQ : 全検査 IQ (以下, FSIQ とする) : 103, Verbal Comprehension Index : 言語理解指標 (以下, VCI とする) : 95, Perceptual Reasoning Index : 知覚推理指標 (以下, PRI とする) : 100, Working Memory Index : ワーキングメモリー指標 (以下, WMI とする) : 103, Processing Speed Index : 処理速度指標 (以下, PSI とする) : 115 であり、「平均」の範囲にある。これらの結果から、ルールや手順が明確な課題に対して、素早く取り組むことができる。」であった。以下の中学生版 SEL-8S (図 1) の作成に関しては、p. 6 に示す。

中学校 2 年生の初回 (4 月末) の筆者との教育相談の際に、生徒 C は沈黙や冗談をはさみながら自分のペースで話を進めた。自分自身について「これから自分一人でやっていけるのかなっていうのがいつも頭にありますね。」と少し微笑みながら語った姿が印象的であった。生徒 C の SEL-8S 自己評定尺度 (図 1) から、社会的能力が全体的にかなり低いことがわかる。②の他者への気づきが他の

学年	8	組	1	番	
氏名				性別	

◆アンケート結果

評価項目	1回目	2回目	備考
① 自己への気づき	2.2#		
② 他者への気づき	42.1		
③ 自己コントロール	31.5#		
④ 対人関係	29.0#		
⑤ 責任ある意思決定	14.3#		
⑥ 生活上の問題防止のスキル	15.3#		
⑦ 人生の重要事態に対処する能力	16.1#		
⑧ 積極的・貢献的な奉仕活動	#REF!		

※ 値は、同学年の平均点・標準偏差をもとに算出した偏差値を示しています。

※ 偏差値が40より低い場合は、値の横に「#」が表示されます。

※ 備考欄に「*1」が記載されている場合、その評価項目の「1回目」の数値は回答漏れなどにより、推定値になっています。（「*2」の場合は、「2回目」の数値）

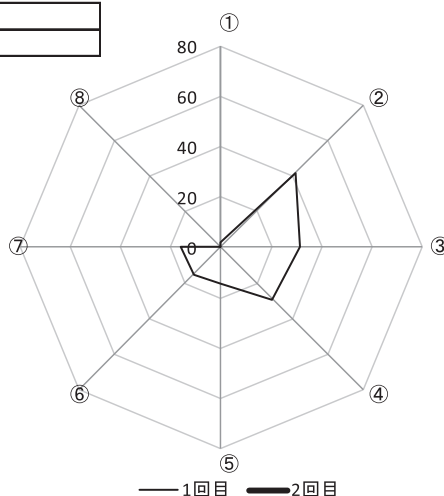


図1 生徒CのSEL-8S自己評定尺度（中学2年生 4月）

評価項目より相対的に高い。在籍校や関係機関の話と合わせて考えると、生徒Cが自分とかかわりのある人について常に関心を寄せながら生きてきたことを表していると思われる。その他の評価項目の低さは、在籍校や関係機関の話と合わせて生徒Cがこれまで投げやり生きてきたことの表れであることを推察できる。また、虚偽の回答から⑧の積極的・貢献的な奉仕活動が集計できない状態になったと推察される。これらのことから、常に漠然とした不安をもちながら孤独を感じている自分を受け止めてもらいたいという生徒Cの思いを感じることができた。生徒Cと信頼関係を構築しながら、ルールの明確な課題や、思考・理解等を伴う学習や活動を行うことによって、生徒Cの個性や可能性を引き出せるのではないかと推察された。

図2は、本田（2020-2023）が包括的なインクルーシブ教育システムをめざして開発したMIチャートである。子どもによる8つの能力に関するアンケート結果から表示されるもので、得意な能力や伸ばしたい能力が客観的に判断することができ、授業や活動に活かすことができる。生徒Cのアンケート結果によるMIチャートから、「内省」、「身体・運動」、「言語・語学」が得意な能力であることがわかる。生徒Cは、他者に関心があるものの、これまでの生育歴から自分から人間関係を築こうとすることができずにいた。しかし、「身体・運動」を通じてグループ活動に参加して、「言語・語学」を使って対人関係を築くことが可能ではないかと思われる。さらに、A施設やB校の授業や活動で実践の振り返りを取り入れ、学級担任である筆者との定期的な教育相談によって生徒Cの内省的知能を深めることができると考えた。

☆ 合計点数を書き入れて、自分のプロフィールをつくってみましょう。

言語・語学			論理・数学			自然・博物学			内省			視覚・空間			身体・運動			音楽・リズム			対人										
1	9	17	25	2	10	18	26	3	11	19	27	4	12	20	28	5	13	21	29	6	14	22	30	7	15	23	31	8	16	24	32
3	4	4	3	1	4	4	3	1	1	4	4	4	4	3	4	4	3	3	2	4	4	4	3	2	3	3	4	1	2	4	4
14			12			10			15			12			15			12			11										

左脳 51

右脳 50

私のベスト3 1位 **内省** 2位 **身体・運動** 3位 **言語・語学**

☆ 同じ点数のとき、順位は表の左から順に表示されます。

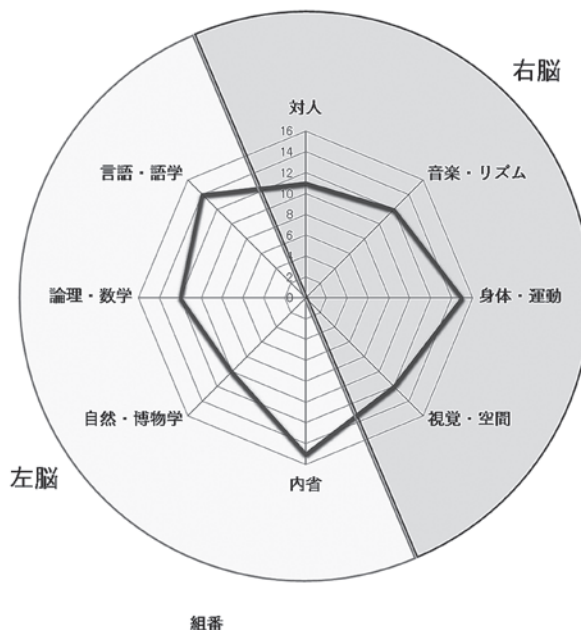


図2 生徒CのMIチャート（中学2年生 4月）

2 MIを活かした活動と教育相談の実践期間

20XX年4月～20XX+2年3月であった。

3 手続きと結果の分析方法

(1) 実力テストの合計得点の変化

本実践の自治体では、中学校1、2年生は、年1回（2月）に実力テストを受験する。中学校3年生は7回（6、7、9、10、11、1、2月）受験する。生徒Cの5教科（国語、数学、社会、英語、理科）の合計得点の変化を辿ることで学力の伸長を分析することにする。

(2) 教育相談の逐語録

生徒 C を含めた学級の生徒の心身の状態を知るために、教育相談の時間を設けた。各生徒につき、月に1回15分から30分程度の時間を取った。A 施設での寮生活のこと、B 校での授業や学校生活、友人関係、家族のこと、進路のこと等について彼らに自由に話をさせて、筆者は、彼らの気持ちを受け止めた。生徒 C については、気持ちの揺れが頻繁にあったため、本人や生徒 C の担当職員からの要望で急遽教育相談を行うことが多かった。逐語録として掲載しているものは、生徒 C や担当職員との了承を得たものである。生徒 C の逐語録の内容を本田 (2006) の表 2-7『内省的知能と 8 つの知能を組み合わせて発揮する能力』(p. 82) の文言を基に、内省的知能が深まったかを確認する。

(3) SEL-8S 自己評定尺度Ⅱから捉えた社会的能力の変化

小泉・山田 (2011) は、小中学校の問題行動について治療・事後的対応だけではなく、予防・開発的取組の重要性を訴え、社会性と情動性の学習とそのプログラムである SEL-8S プログラムを開発して、学校における 8 つの社会的能力 (自己への気づき、他者への気づき、自己のコントロール、対人関係、責任ある意思決定、生活上の問題防止のスキル、人生の重要事項に対処する能力、積極的・貢献的な奉仕活動) 育成をめざしている (pp. 3-27)。さらに山田・小泉 (2015) は、社会的能力を「周囲の人々や集団との良好な関係やかかわりを持つ力」と定義し、SEL-8S 自己評定尺度の信頼性と妥当性を示している。本実践で用いた中学生版 SEL-8S 自己評定尺度は、5 つの下位尺度からなる基礎的な社会的能力尺度と 3 つの下位尺度からなる応用的な社会的能力尺度からなり、各下位尺度に 3 項目ずつ計 24 項目と虚偽尺度 2 項目を合わせた全 26 項目で構成されている。そして各項目について 4 件法により回答を求め、社会性が高い選択肢から順に 4～1 点をつけている。本実践では、生徒 C の中学 2 年次の 4 月と中学 3 年次の 3 月の 2 回測定することで、その変化から社会的能力について分析することにする。

4 実践の概要

A 施設には、伝統的に行われている行事がいくつかある。その中でも最も重要なものとして位置づけられている行事が学園祭である。学園祭では、保護者や在籍校の教員、関係機関の職員等大勢の人々を招いて入所児童の成長を披露する。B 校でも学習の成果を披露する場として学園祭に協力することにした。MI の 8 つの知能を活かせるような学習の成果の活動としてミュージカルを行うことにした。ミュージカルには、人権劇、合唱、書道パフォーマンス、入所児童一人ひとりによる決意発表を順番に盛り込み、指導や支援を行った。児童自立支援施設は、随時入所児童を受け入れていることや、学力不振や特性のある入所児童が多いことから、年度の始めから学園祭の準備を少しずつ始める。B 校教員は、内省的知能を伸ばすために、自己理解力と自己表現力を伸ばす工夫 (本田, 2006) を取り入れながら児童の入所に合わせて基礎学力を身に付けさせるための授業とミュージカルの指導を行う。A 施設職員には、授業の補助、寮での個別学習や練習への協力を依頼した。そして筆者は、かつとなりやすい入所児童の特性を考慮して、本田 (2006) の授業における振り返りのコツ (p. 85) を放

表1 内省的知能を軸にMIを活かした授業や活動，教育相談で大切にしたこと

B校教員が授業やミュージカルの指導で大切にしたこと	学級担任として放課後の教育相談で大切にしたこと
○自己理解力を伸ばすために ・情報を集める力 ・情報を整理する力 ・全体把握ができる力 ・行動予測ができる力（これをやったらどうなるか） ・優先順位を決めるための価値観（自分・他者）の理解 ・適切な方法を選ぶ力 ・選択にあたり，他者の意見を聞く・聴くことができる力	○事実の確認（「視覚・空間」・「博物学」知能の応用） ・「何があったのか話してくれる？」 ・「失敗さん，ありがとうだね。」 ・「最初から順番に整理してみよう。」 ○考えの視点を変えるとき（「論理・数学」知能の応用） ・「見方を変えるとどうなる？」 ・「これをやったら，どうなりそう？」
○自己表現力を伸ばすために ・言語表現能力（話し言葉・書き言葉） ・非言語表現能力（ジェスチャー，表情，アイコンタクト，ことばの抑揚・スピード，姿勢など） ・行動力（表現したいタイミングに合わせて，自分の体を適切に動かすことができる力）	・「他の人は，なんて言ってた？」 ・「あの意見とどう違う？」 ○気持ちを整理するとき（「論理・数学」知能の応用） ・「今の苦しさは10のうちどのくらい？」 ・「何が一番苦しいんだろう？」 ・「だれに対してそう言いたいのかな？」

表2 B校教員が指導するミュージカルにおける8つの知能のMIホイール

8つの知能	ミュージカルの活動
音楽・リズム的知能	情動を表現する音楽の理解と表現をする。 (合唱)
身体・運動的知能	役割を決めて演技をする。 道徳心に沿った行動をする。 (人権劇) (ミュージカルすべて)
言語・語学的知能	言葉や歌詞の奥にある情感，意味を理解する。(合唱，人権劇，書道パフォーマンス) 1つのことを深く考える。(人権劇，書道パフォーマンス，決意表明)
内省的知能	自分はだれか存在意義を考え，理解する。(人権劇，書道パフォーマンス，決意表明)
対人的知能	独立心，人と異なる意見であっても気にしない。(書道パフォーマンス，決意表明) 自己主張をする，相手の気持ちを感じ，はかり知る。(ミュージカルすべて)
論理・数学的知能	ものをつくる，組み立てる，分類する，分析する。(ミュージカルすべて)
博物学的知能	自分についての情報を集める，考えたり感じたりしたことを分類する。 (ミュージカルすべて)
視覚・空間的知能	芸術作品を理解・鑑賞・評論する。(書道パフォーマンス)

課後の教育相談で用いることで，入所児童の事実確認や気持ちの整理，考えの視点を変えることに努めた。それらの2年間の実践で大切に示したものが表1である。表2は，ミュージカルにおける8つの知能をMIホイールで示したものである。

【結果と考察】

本実践の結果と考察について，生徒Cの中学1年次から3年次までの9回の実力テストの合計得点の変化，教育相談の逐語録，SEL-8S自己評定尺度から捉えた社会的能力の変化から述べることに

する。なお、生徒 C と担当職員に本実践に必要な情報のみを個人のプライバシーに十分配慮して使用することを説明し、生徒 C、担当職員ともに許可を得た。

1 実力テストの合計得点の変化

小学校低学年の頃から不登校の状態であった生徒 C であるが、中学 2 年次に入所してから A 施設職員や B 校教員等の大人との会話を楽しむようになった。言葉に興味をもつようになり、好きな曲の歌詞をノートに書き写してその意味を考えたり、その言葉を使って会話したりするようになった。さらに美術のデザイン画やポスター等のアイデアに、自分の好きな言葉をイメージする絵を描くようになった。イメージと言葉と意味が結びつけることができたことで、さまざまな教科の授業において理解や表現の力の高まりを見て取れるようになった。寮の自室での自習にも時間を延長して取り組み、テスト前は休日も長時間にわたって学習に励んだ。施設職員にも積極的に質問していた。その結果、表 3 から実力テストの合計得点が回を重ねるたびに上がっていることがわかる。生徒 C は学習に自信をもち、自分なりの学習方法を身に付けた。また、希望する高等学校に十分合格できるほどの学力も身に付けることができた。

2 教育相談での生徒 C の逐語録（一部）

表 4 の 1)～6) の生徒 C の語りを、本田 (2006) の表 2-7 (p. 82) の『内省的知能と 8 つの知能を組み合わせて発揮する能力』の文言に照らし合わせることで、生徒 C の内省的知能の深まりをみることにする。1) では、自分は何だか存在意義を考え、理解する様子が見えがえる。2) では、相手の気持ちを感じ、はかり知る様子や 1 つのことを深く考える様子を感じられる。3) では、独立心や人と異なる意見であっても気にしない様子や、考えたり感じたりしたことを分類する様子が見えがえる。4) では、道徳心に沿った行動を取ろうとする様子を感じられる。5) では、受験について生徒 C

表 3 生徒 C の中学 1 年次から 3 年次までの 9 回の実力テストの得点

各 50 点満点	国語	数学	社会	英語	理科	合計 (250 点満点)
中 1 (2 月)	5	2	7	2	3	19
中 2 (2 月)	10	3	10	3	5	31
中 3 (6 月)	12	3	17	9	10	51
中 3 (7 月)	10	5	21	8	12	56
中 3 (9 月)	17	6	25	11	15	74
中 3 (10 月)	19	5	29	9	18	80
中 3 (11 月)	25	3	26	12	15	81
中 3 (1 月)	21	7	28	15	13	84
中 3 (2 月)	27	5	25	17	17	91

表4 教育相談での生徒Cの逐語録

<p>1) 中学校2年次 (4～7月)</p> <p>「<u>ぼく、小さい頃からずっと人を観察する癖があって……。別に変な意味じゃないですよ。この人はこんな人かなとか、今、こんなこと考えてるのかなとかいろいろ想像しますね。先生 (筆者) は、……そうですね、いつも何か考えてる感じですね。頭の中で何か作っているっていうか。頭っていうと、ぼくは勉強ができるようになってきたなって思います。まあ、余裕です。まだまだいけますよ。</u>」</p>
<p>2) 中学校2年次 (9～12月)</p> <p>「<u>あの……、3年が寮で好き勝手するんですよ。職員もそれを止められないっていうか。まあまあ、みたいな。なだめるって言うんですかね。でも、自分ら (2年) には変わらずガンガンくる。職員からしたら、ちゃんとさせないといけないというのがるから、そこは一応わかっているつもりなんですけど。同じ寮の中なのに対応が職員の対応が2年と3年で全然違うし、自分らは3年に何かされないかなっていつも不安になるんですよ。うーん、ここ (A施設) に来る前、とにかく守ってもらいたいっていう気持ちが強かったから上級生のところにふらっと行ってしまったっていうのがあると思うんですよね。</u>」</p>
<p>3) 中学校2年次 (1～3月)</p> <p>寮で3年生が受験勉強に励む姿を見ながら、生徒Cは、学習のことや高校進学について話をするようになった。「寮の日課や当番とか、勉強も自分なりに慣れてきて、まあまあ器用にこなせるようになってきたんですけど……、数学できないですね。あ、もちろん〇〇先生 (数学教諭) は好きですよ。受験勉強の中でも頑張りますけど、他のできることでは補えばいいかなって言うものちょっとあります。うーん、その方が気が楽になるというか。」</p> <p>「<u>ここ (A施設) 出たらどうなるかわからないから、買い物外出に行っても本当に必要なものを考え抜いて買って、長持ちするように大事に使ってお金を貯めておこうと思うんです。</u>」</p>
<p>4) 中学校3年次 (4～7月)</p> <p>「<u>自分がA施設で一番長いんで、お手本にならないといけないなって思うし、小学生や1・2年生に教えることがよくあります。うーん、なんか……、生活しながら、やっぱりガンガン言う職員に納得いなくて。怒って言ったらええと思ってる？</u>」 「<u>でも一緒に生活してるわけだからちょっと距離をおいてます。もちろん、やることは手を抜かずちゃんとやりますよ。</u>」 <u>野球大会に向けて、ピッチャーを任された生徒Cは、寮での自由時間もキャッチボールや筋トレ、ランニングを黙々と行っていた。大会当日では、これまで野球経験のなかった自分のピッチングがチームの勝利に貢献できたことにうれし涙を流す場面が見られた。生活記録には『一期一会』とよく書くようになった。</u></p>
<p>5) 中学校3年次 (9～12月)</p> <p>学園祭が終わり、高校受験の出願の時期が近づいてきた。生徒Cは受験をするかどうか悩んでいるようだった。しかし、冬休みに入る直前の夜、生徒Cは、「<u>いろいろ考えたんですけど、やっぱり受験しようと思います。</u>」</p>
<p>6) 中学校3年次 (1～3月)</p> <p>生徒Cは、3年生の同じクラスメートとともに毎日遅くまで受験勉強や面接練習に励んでいた。志望校に合格できる学力を身に付けることができている。一方で、教育相談では、「<u>僕は一人で生きていけないといけない。どうなるんだろうってばかり思ってしまうよ。</u>」との言葉が多くなった。生活記録の日記の欄には真っ暗な闇の中で1本の木の根元に泣きながら横たわる自分の姿を絵に描くようになった。また、筆者の学級の別の生徒が「先生、Cはちょっとやばいですよ。寮に行って声かけてやってもらえませんか。」とそっと筆者に教えてくれた。寮の生徒Cの自室に行くと、生徒Cはシャープペンシルの先で自分の右腕の内側を傷つけていた。「ごめん。」と筆者は生徒Cの右腕を思わず握って泣いてしまった。「大丈夫ですよ。」生徒Cは微笑んだ。</p> <p>その後、生徒Cは1校のみ受験した。その日の朝、生徒Cは明らかに受験にはふさわしくないコートを着ていた。そして受験校の教室の椅子を蹴って受験を拒否した。「合格した後の自分の姿が想像できなかったんです。やっていける自信がなくて、怖くなって。」生徒Cは受験のことを振り返った。卒業の際の筆者への寄せ書きに、生徒Cは、「You mean my life. You are my life itself.」と書いていた。</p>

なりに考え抜いたようだった。6)では、これまでの自分についての情報を集めて考えたり感じたりしたことを分類した上で、受験をしないという自己主張に至ったのだと筆者は推察した。これらのことから、生徒Cの内省的知能は深まっているといえるのではないか。

3 生徒Cの中学生用SEL-8S自己評定尺度Ⅱ

生徒Cの中学生用SEL-8S自己評定尺度Ⅱの1回目と2回目を比較しながら、社会的能力の育成について考察する。図3から、中学校3年生3月の生徒Cの①～⑧の社会的能力の伸びがわかる。内省的知能を軸としたMIを活かした活動が、生徒Cの社会的能力を伸ばす一助になったのではないかと思われる。生徒Cの語りからも、1つのことに深く考えるようになり、自分自身を客観的にみることができるようになったことがわかる。入所当初は、自分のことを伝えようとしても言葉につまることが多かったが、A施設職員やB校教員との会話に楽しみを楽しむようになってから、図書、歌詞などから言葉を吸収し、それらを用いて授業での振り返りや教育相談で自分自身や他者について語るできるようになったと思われる。それによって、自分や他者の良さに気づき、それぞれの立場を尊重したり助け合ったりする経験によって、①～⑥が伸びたと思われる。⑦については、筆者との教育相談のやりとりや語りを重ねて伸びたものと思われる。また、活動の中で自分に与えられた役割を全うして成功した経験を積み重ねてきたことによって、他者への気配りや配慮ができるようになり⑧が伸びたと思われる。

学年	8	組	1	番	
氏名				性別	

◆アンケート結果

評価項目	1回目	2回目	備考
① 自己への気づき	2.2#	60.2	
② 他者への気づき	42.1	48.1	
③ 自己コントロール	31.5#	36.3#	
④ 対人関係	29.0#	49.6	
⑤ 責任ある意思決定	14.3#	47.7	
⑥ 生活上の問題防止のスキル	15.3#	44.5	
⑦ 人生の重要事態に対処する能力	16.1#	37.7#	
⑧ 積極的・貢献的な奉仕活動	#REF!	43.2	

※ 値は、同学年の平均点・標準偏差をもとに算出した偏差値を示しています。

※ 偏差値が40より低い場合は、値の横に「#」が表示されます。

※ 備考欄に「*1」が記載されている場合、その評価項目の「1回目」の数値は回答漏れなどにより、推定値になっています。「*2」の場合は、「2回目」の数値

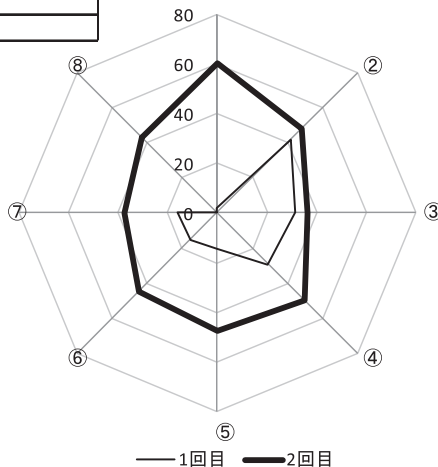


図3 生徒CのSEL-8S自己評定尺度（中学2年生4月・中学3年生3月）

【まとめと今後の課題】

本実践は、内省的知能を軸とした MI の理論を活かした自立支援の連携の試みの社会的能力への有効性を学級担任の立場から明らかにすることを目的とするものである。筆者の B 校での勤務当初、B 校教員は、本校としてのこれまでの勤務校と併設校としての B 校との文化の違いに大きな戸惑いを感じていた。さらに A 施設職員と B 校教員の間でも児童自立支援施設とその併設校のあり方についてさまざまな考え方の違いが連携の弊害になっていたと思われる。筆者は A 施設職員と B 校教員のそれぞれの考えや思いを理解するために、普段から彼らの語りに真摯に耳を傾けた。また、筆者自身も自立支援の連携の目標や願いについて語ってきた。さらに内省的知能を軸とした MI の理論を活かした活動を連携して行ってきた。連携が進むことによって、入所児童へのかかわりにおいても大きな変化が見られた。これまでの「厳しく取り締まる」姿勢から「入所児童の語りに真摯に耳を傾け、受け止めた思いを連携に活かす」姿勢へと変わってきたことを筆者は感じた。

本実践の結果と考察から今後に残された課題は、対象生徒が 1 人であった点である。また、2 年間という期間から、生徒 C の社会的能力が伸びた要因に、下級生が増えたことによって良い先輩であろうとしたことや、A 施設や B 校に慣れた等も考えられる。対象生徒を増やしたり、他の児童自立支援施設と併設校との連携の取組を検証したりすることで、MI を活かした自立支援の連携のあり方や効果の検証を検討する必要がある。今後もさらに実践を深めていきたい。

引用文献

- 藤田知美 (2013) 少年院における教科指導 特殊教育学研究 51 (3), pp. 321-328.
- 本田恵子 (2006) 脳科学を活かした授業をつくる 子供が生き生きと学ぶために、みくに出版.
- 本田恵子 (2020-2023) マルティプルインテリジェンスを活用した包括的なインクルーシブ教育システムの開発 共同研究・競争的資金等の研究課題.
- 岩田智和 (2022) 児童自立支援施設における学校教育の歴史的変遷—「準ずる教育」から「学校教育」への転換に焦点をあてて—, わかやま子ども総合研究センタージャーナル No. 3, pp. 27-36.
- 小泉令三・山田洋平 (2011) 社会性と情動の学習 (SEL-8S) の進め方中学校編, ミネルヴァ書房.
- 厚生労働省 (1998) 「児童養護施設等における児童福祉法等の一部を改正する法律の施行に係る留意点について」(通知)
- 厚生労働省児童家庭局家庭福祉課 (1998) 児童自立支援ハンドブック.
- 文部科学省 (1998) 「児童自立支援施設に入所中の児童に対する学校教育の実施等について」(通知)
- 中村彩歩・今井康好・酒向治子 (2021) MI 理論に基づく授業開発の試み 岡山大学教師教育開発センター紀要, 第 11 号 別冊, pp. 247-261.
- 清水凌平・村上忠幸 (2021) 多様で協働的な学習活動を実現するためのマルチプル・インテリジェンス理論およびデボノの帽子の活用・実践 教職キャリア高度化センター教育実践研究紀要, 第 3 号, pp. 219-225.
- 高橋一雄 (2020) 矯正教育における教科指導 (補習教育指導) の役割 21 世紀社会デザイン研究 No. 9, pp. 129-142.
- 玉城晃・神園幸郎 (2013) 児童自立支援施設における発達障害のある児童生徒への指導・支援に関する研究—施設併設の分校・分教室における教育的支援について— Asian Journal of Human Services VOL. 5 pp. 64-77.

徳本義和・上島崇（2017）MIとASSESSを活用した授業実践と研究～五條小学校の取組～思考力向上を目的とした「マルチプルインテリジェンスを活用した授業づくり」研究発表会，pp. 1-10.

富永岳・村上忠幸（2022）個人探究におけるメタ認知のためのマルチプル・インテリジェンス理論および省察の活用 教職キャリア高度化センター教育実践研究紀要，第4号，pp. 199-207.

矢作由美子（2021）少年院における教科指導の役割 教育研究所紀要，pp. 71-82.

山田洋平・小泉令三（2015）中学生版「社会性と情動」尺度（SES-S）の信頼性と妥当性の検討および社会的能力の発達的变化—基礎的な社会的能力尺度および応用的な社会的能力尺度の検討—ピア・サポート研究，第12号，pp. 1-10.

全国児童自立支援施設協議会（2020）「全国児童自立支援施設運営実態調査 平成31年/令和元年度」